

〔巻頭言〕

会長就任にあたって

平成 14 年度会長 吉 澤 徴[†]

平成 13 年度長野靖尚会長の後を受けまして会長に就任しました。池田駿介副会長をはじめとする役員諸氏、石塚健事務局長のご協力をいただき、微力ながら職責を全ういたしたく存じます。平成 13 年度は、11 年度木村龍治会長、12 年度村上周三会長のもとで行われた年会開催方式の改善に加え、財務基盤の整備、学会運営諸規則の改正および制定、会誌「ながれ」や「FDR」の充実などが推進されました。また、優れた研究成果を挙げられた学会員を論文賞、竜門賞、技術賞の 3 賞をもって顕彰する制度も定着しつつあります。とくに、技術賞は本会と企業研究者との連携を図る重要な制度であります。平成 14 年度評議員選挙に際しましても地区別選出制に加え、企業会員枠を設ける新制度が導入されましたが、今後も本会と産業界との連携を発展させるための一層の努力が必要であります。

平成 14 年度の大きな課題の一つとして、平成 13 年度長野靖尚会長のもとで推進された日本数値流体力学会との融合の実現があります。この件に関しましては、「ながれ 20 巻 6 号 (2001 年 12 月)」におきまして、「日本数値流体力学会との融合に関する検討報告」として会員各位にその経緯がすでにご報告されました。また、日本数値流体力学会平成 13 年度笠木伸英会長、久保田弘敏副会長と本会平成 13 年度長野靖尚会長、吉澤徴副会長の間で取り交わされた「融合に関する基本的合意事項」が、2002 年度総会 (2002 年 2 月 16 日開催) において承認されました。今後は、両学会からの委員より構成される「融合に関する特別委員会」が組織され、平成 14 年 10 月 1 日の両

学会の融合に向けて、数値流体力学部門の設置、諸規則の整備が行われます。本会からは、池田副会長が責任者となり、その掌にあたります。

本会と日本数値流体力学会との融合は、会員数の増加



平成 14 年度会長 吉澤 徴

という規模の拡大を超えた意義があります。本会は歴代の役員、評議員の方々のご尽力および会員各位のご協力によって発展を遂げて参りましたが、成熟は時には停滞を意味することもあります。幅広い流体関連分野の包括を目指す本会と、数値流体力学とその産業技術への応用を主目的とする日本数値流体力学会は互いに補完的立場にあります。本会と日本数値流体力学会との融合は異なる目的を持って設立された組織の再編成であり、本会に大きな刺激を与えるものであり、さらなる発展のための好機と言えます。

本会は多様な流体现象に関わる研究者、技術者から構成されており、本会以外の学会を主要所属学会としている会員が多々おります。そのような会員が、本会に所属することの意義は、他分野の流体関連研究者、技術者との交流によって幅広い意見交換を行い、直接の関心対象にとらわれずに議論できることであります。このような目的が実現できるためには、基礎的、応用的研究あるいは理学的、工学的研究という従来の区分を超えた意見交換の場が必要であり、本会運営に際してもこれまで以上にこの点に注意を払う必要があります。

[†] E-mail: yosizawa@iis.u-tokyo.ac.jp

す。日本数値流体力学学会との融合は、この目的に合致した計画でもあります。

第一線の流体関連研究者、技術者の一層の活躍を支援することは本会の主たる任務であります。が、若手研究者、技術者およびこれを目指す人達に大きなインセンティブを与えることも同等に重要であります。乱流の数値計算に関連した研究を一例として、この点に関して述べてみます。現在、乱流の数値計算が関与する領域は極めて広く、産業技術においても重要な道具となっております。日本においてこの方面の研究が活発に行われるようになったのは1980年代半ば以降であり、大小さまざまな規模の研究集会が開かれ、その中には欧米ですでに切り開かれた領域をまず学ぶという勉強会的なものも少なくありませんでした。私の限られた経験においても、当時すでに指導的立場にあった研究者がこれに参加するなど、研究への熱気が強く感じられました。私自身もこの恩恵に浴しましたが、現在中堅の研究者として活躍している方々が研究人生の端緒においてこの雰囲気に関与し、研究の最前線との隔たりの少なさを実感できたのは幸運ではなかったかと思ひ

ます。実際、そのように述懐される研究者の声を何度も聞いてきました。翻って現状を見ますと、この分野に足を踏み入れた若手研究者がそれまでに受けた教育と研究の最前線とのかい離が当時に比べてはるかに大きいため、世代間の研究交流の機会が減り、熱気が薄らいでいるのではないかと危惧されます。このような状況はここで挙げた一例に限らず、さまざまな研究分野にあり、研究の進歩と表裏一体の関係にあります。しかし、各研究分野に残された難問の解決と新分野の開拓はこれら若手研究者の双肩にかかっておりますので、このようなかい離を減らすための努力はさまざまなレベルでなされるべきであり、本会の重要な責務の一つと思います。これから進められようとしている支部の結成は、現状の改善に寄与するものと期待されています。

上に述べましたように、研究者、技術者間の交流に加え、学生会員を含む若手研究者、技術者への啓蒙活動など本会が果たすべき重要な任務は多々あります。役員の方々および事務局と協力し、これらの任務の実現に向けて努力いたしますので、会員各位のご協力をお願い申し上げます。

2002年度理事・監事

会 長	吉澤 徹	東京大学生産技術研究所教授
副会長	池田 駿介	東京工業大学工学部土木工学科教授
理 事	植田 洋匡	京都大学防災研究所教授
理 事	海老 豊	(株)リコー画像技術開発本部本部長
理 事	及川 正行	九州大学応用力学研究所基礎力学部門教授
理 事	金田 行雄	名古屋大学大学院工学研究科計算工学専攻教授
理 事	久保田弘敏	東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻教授
理 事	豊田 國昭	北海道工業大学工学部機械工学科教授
理 事	中橋 和博	東北大学大学院工学研究科航空宇宙工学専攻教授
理 事	萩原 良道	京都工芸繊維大学工芸学部機械システム工学科教授
理 事	菱田 公一	慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科教授
理 事	水野 明哲	工学院大学工学部機械工学科教授
理 事	山田 道夫	東京大学大学院数理科学研究科教授
監 事	日比 一喜	清水建設(株)技術研究所流体解析グループ部長
監 事	本阿弥眞司	東京理科大学工学部機械工学科教授